

今成: 借りたものは返す! これ, 当たり前だろ!!

[今成君は強い調子, 教室中に聞こえる大きな声で言いました。もちろんこれは教室の後ろにいる謎の女子高生に注意を向けるためのものでした。]

幸一: (困り果てた様子で) で, でも …

今成: じゃあよ, 放課後, 俺が出した問題に瞬時に答えられたら許してやるよ。

[今成君は, 謎の女子高生の方を横目で見ながらにやっとして, そして穏やかな口調で言いました。近くで見ていたるいさんは, 事情がつかめていません。]

るい: なんで, そうなるの? わけわかんなくない?

今成: いいんだよ。他の人は口を出すなよ。俺と福山のことだから。

幸一: わかった! いいよ。僕だって, 結構勉強しているんだし受けて立つよ。

るい: 大丈夫かなあ。

[この様子をももちろん謎の女子高生が見ていました。今成君はちらっと謎の女子高生の方に目をやりました。]

今成: (ふふふっ。もちろん, 福山の力なんかを試すつもりはないさ。)

放課後になりました。教室には幸一君と今成君だけがいます。幸一君は自分の席に座っていて, 今成君は教壇の上に座っています。廊下には心配そうにこっそりと謎の女子高生が見守っていますが, ここに彼女がいることは今成君はわかっていました。

幸一: で, 何するの?

今成: 今から, 問題を 5 題出す。ほとんど公式で一発だから計算用紙なしで答えてもらう。全部答えられたら貸した本のことはなしにしてやるよ。おまえ, 最近, 力付けたようだからな。試してみたくてな。

